

9. 坂田寺の調査

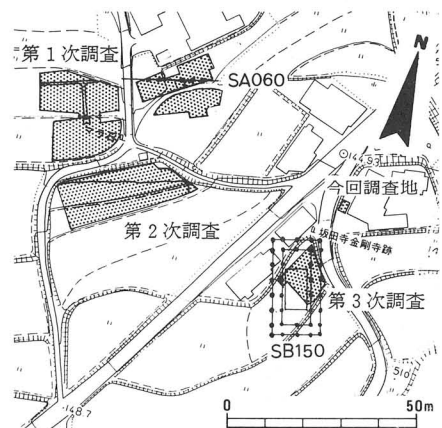
(昭和57年2月)

調査地は、第3次調査で検出した基壇建物SB150の北10mにある民家の敷地内であり、地表面は第3次調査地より0.8m低く、遺構の一部が露出するまでに削平されている。調査地層序は薄い表土の下に暗灰褐色土・灰褐色土があり、暗灰褐色土層上面で石組井戸SE154を、灰褐色土上面で石組遺構SX153を検出した。

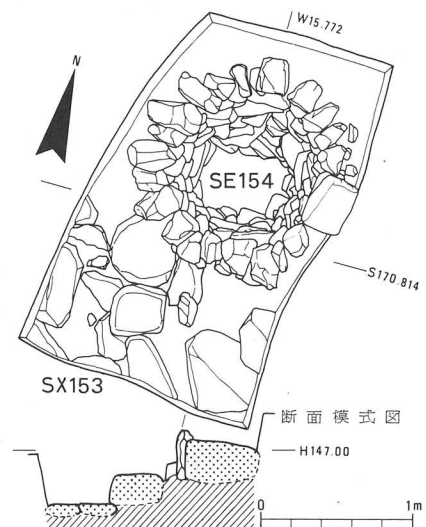
石組井戸SE154は、直径0.9m、深さ1.5mの規模で、人頭大の自然石を用いている。井戸埋土には瓦、土師器、須恵器、瓦器、磁器などが含まれ、室町時代後半にはその機能は失なわれていたとみられる。

石組遺構SX153は、調査区南端でごく一部を検出したにとどまるうえ、SE154に壊されており不明な点が多いが、直径30～40cm大の自然石を三段に組んだ構造をもつとみられ、玉石積基壇の一部である可能性がある。上段の石列は西に面をそろえて立て並べた縁石であり、その西側には、中段の石を、上段よりも40cm低く面をもたせて南北に敷き並べている。さらにその西には、中段の石よりも低く、やや小ぶりの石で下段の石敷面をつくっている。

SX153は北で西へ約15°振れた方位をなし、これは第3次調査の基壇建物SB150の振れとほぼ一致している。SX153が玉石積基壇の一部であるとすれば、坂田寺の主要伽藍の一部を構成する基壇建物の存在を示すものである。しかし、造営年代や規模等不明な点も多く、結論は周辺地での調査の進展にまちたい。



第30図 坂田寺調査位置図 (1:2000)



第31図 調査遺構配置図 (1:50)